研究課題　小川八幡神社大般若経の文化資源化研究

研究経費　一三五万円

研究組織

　研究代表者　　　山口英男

　所内共同研究者　田島公・尾上陽介・遠藤基郎・伴瀬明美・藤原重雄・稲田奈津子・堀川康史・黒須友里江

　所外共同研究者　大橋直義（和歌山大学教育学部・准教授）・坂本亮太（和歌山県立博物館・主査学芸員）・竹中康彦（和歌山県立博物館・主幹（学芸課長））・傳田伊史（長野市立長野高校・教諭）・西本昌弘（関西大学文学部・教授）・福島正樹（信州大学大学史資料センター・特任教授）・本郷真紹（立命館大学・教授）・矢越葉子（明治大学研究・知財戦略機構・研究推進員）・李乃琦（日本学術振興会・外国人特別研究員）

研究の概要

（１）課題の概要

　和歌山県紀美野町の小川八幡神社が所蔵する大般若経は、全600巻（現状は折本600帖）が現存し、約120巻の奈良時代写経、約380巻の平安時代写経を含み、1978年に学界に紹介されて以来、古代の文化史・地域史等に豊かな情報を提供する研究対象として注目され、本格的な研究利用のための詳細な原本調査が待たれていた史料群である。今般、関係諸方面の尽力によって環境が整い、本格調査の実施が可能となったことから、小川八幡神社大般若経全点の原本調査、赤外線撮影を含めたデジタル写真撮影、既存調査データの収集・整理等を行い、その成果を公表し学術資源化するとともに、小川八幡神社大般若経の成立・変遷・伝来等をめぐる多面的な研究を進展させ、その文化的価値を広く発信することを通じて地域・社会への研究成果還元をはかるものである。

（２）研究の成果

　2020年度末時点で、小川八幡神社大般若経600巻（60帙）53帙について調査に着手し、450巻程度について、調書の作成が完了した。調査未了巻についても、料紙等の法量の採寸はほぼ終了した。カラーデジタル撮影については、311巻について完了した。

研究課題　賀茂別雷神社文書の調査・研究

研究経費　一三九万円

研究組織

　研究代表者　　　金子拓

　所内共同研究者　久留島典子・遠藤基郎・遠藤珠紀・川本慎自・林晃弘・石津裕之・高橋敏子

　所外共同研究者　伊藤真昭（京都橘大学・非常勤講師）・宇野日出生（京都市歴史資料館・主任）・大山喬平（京都大学・名誉教授）・加瀬直弥（國學院大学神道文化学部・准教授）・五島邦治（京都芸術大学・特任教授）・三光寺由実子（和歌山大学経済学部・准教授）・志賀節子（賀茂別雷神社史料編纂委員会・委員）・須磨千頴（南山大学・名誉教授）・大東敬明（國學院大学研究開発推進機構・准教授）・竹田和夫（新潟大学・非常勤講師）・辰田芳雄（就実大学・非常勤講師）・谷徹也（立命館大学文学部・准教授）・中川学（東北大学高度教養教育・学生支援機構・准教授）・野田泰三（京都橘大学文学部・教授）・藤田恒春（賀茂別雷神社史料編纂委員会・委員）・三枝暁子（東京大学大学院人文社会系研究科・准教授）・山本宗尚（一般財団法人リモート・センシング技術センター・研究員）・横井靖仁（関西大学・非常勤講師）

研究の概要

（１）課題の概要

　これまで史料編纂所では、賀茂別雷神社文書について継続的な調査・撮影をおこない、画像やデータの蓄積とその公開を進めてきた。賀茂別雷神社文書（京都府賀茂別雷神社所蔵）は、近年の京都府による調査で約一四〇〇〇点に整理されたが、史料編纂所ではこのうち四二二二二点（二一二五〇コマ）のデジタル化を終えている。  
　同社文書については、文明八年(一四七六)の賀茂一社争乱といわれる祠官と氏人との争い以前のものは少なく、これ以後、江戸初期の寛文五年(一六六五)頃までの文書を非常に多く残している。本研究においては、この期間の文書約八〇〇〇点のうち、中世を中心に調査・撮影をさらに継続し、デジタル化・データベースからの公開（研究資源化）を進めるとともに、これらを用いた賀茂別雷神社、同社の文書、および同社の神事、組織、所領について、また、同社の文書を用いた中近世の政治史、文化史などの研究をおこなう。

（２）研究の成果

　今年度は研究会を開催することができなかったが、そのかわりに、ここ三年間の共同研究の活動成果を研究成果報告書としてまとめ、『賀茂別雷神社の所領と氏人』として刊行した。また、所内担当者および共同研究員が委員として加わっている賀茂別雷神社史料編纂委員会より、『賀茂別雷神社史料２　氏人起請文・請文・請状』を刊行した。  
　成果報告書は、氏人組織や社領に関する中世および近世の研究、また、賀茂別雷神社を研究するうえで貴重な史料の史料紹介を収めたものであり、時代を問わず多様な関心から賀茂別雷神社文書に関心をもつ研究者が集まったからこその成果であると考える。

研究課題　史料編纂所所蔵維新関係貴重史料の研究資源化

研究経費　一二六万円

研究組織

　研究代表者　　　小野将

　所内共同研究者　保谷徹・杉本史子・箱石大・水上たかね・立石了

　所外共同研究者　麓慎一（佛教大学歴史学部）・岸本覚（鳥取大学地域学部）・谷本晃久（北海道大学文学部）・白石烈（宮内庁書陵部編修課）・梁媛淋（武蔵野学院大学コミュニケーション学部）・福元啓介（尚古集成館）

研究の概要

（１）課題の概要

　本所が特殊蒐書として所蔵する維新関係貴重書史料群は、質量ともに国内有数のコレクションでありながら、一部を除き史料学的調査・研究は着手されたばかりである（デジタルアーカイヴ化も未形成）。本研究では対象史料群のうち、維新史料引継本（約2万冊、戦前期の維新史料編纂会が収集した史料群）・外務省引継書類（約3000冊、政府から移管された江戸幕府の外国方関係史料）・史談会本（約2000冊、旧華族諸家が複製収集した幕末維新史料群）、また、国宝島津家文書や島津家本のうち、幕末維新関係史料を対象とする。当該時期のそれぞれの地域を専門とする共同研究者を募集し、厳密な史料学的検討を加えつつ、各史料の記述内容を確認して解説目録の作成に着手する。明治維新への社会的関心をも見据えて、本研究の成果を公開し、来たるべきデジタルアーカイヴ化に向けての基礎的作業を実施する。

（２）研究の成果

　本年度までの成果を受けて、論文を公開した。明治21年（1888）開始の、宮内省による旧藩事蹟取調事業および、それを契機に発足した史談会との関係を検討した白石烈「宮内省の旧藩事蹟取調事業と史談会」（下）（『書陵部紀要』第72号、2021年3月）は、本来密接不可分だった両者収集の史料群が現在、宮内庁書陵部所蔵「旧藩事跡取調掛本」と史料編纂所特殊蒐書の「史談会本」とに分散して伝存されている経緯を解明した上で、旧藩事績取調書類の全体像の確定をめざしたものである。ここでは、明治20年代の大名華族それぞれによる、史料保存や編纂事業に対する姿勢の相違や、維新初発以降の動向の変化など、実に興味深い論点が抽出されたといえる。  
　また、維新史料引継本のような大規模史料群については、様々な専門的見地を持ち寄ったうえ、多様な視角から検討してゆくことがなおも重要である。他にも成果として、論稿と学会発表を公開した。  
　今年度の研究集会では、これまでの史談会本の調査にもとづく白石研究員の報告、幕末北方関係史料の調査にもとづく谷本研究員の報告、日露関係史料の調査にもとづく麓研究員の報告、鳥取藩士安達清風関係史料の調査にもとづく岸本研究員の報告、また尾張藩士鳥居家文書の調査にもとづく梁研究員の報告を受け、活発な討議がおこなわれた。研究のコアとなる有意義な情報をそれぞれ共有することができたが、これを受けて次年度にはいよいよ本共同研究の取りまとめを果たしてゆきたい。引き続き共同研究のメリットを活かし、様々な知見をあわせて総合的に考察することで、史料学的検証への寄与を継続してゆく。

研究課題　モンスーン文書・イエズス会日本書翰・VOC文書・EIC文書の分野横断的研究

研究経費　二三六万円

研究組織

　研究代表者　　　松方冬子

　所内共同研究者　岡美穂子・岡本真・大東敬典・水上たかね

　所外共同研究者　大久保健晴（慶応義塾大学・准教授）・川西孝男（関西学院大学・研究員）・久礼克季（川村学園女子大学・非常勤講師）・イサベル・田中・ファンダーレン・冨田暁（岡山大学・客員研究員）・中砂明徳（京都大学・教授）・鍋本由徳（日本大学・准教授）・野澤丈二（帝京大学・准教授）・橋本武久（京都産業大学・教授）・真下裕之（神戸大学・准教授）

研究の概要

（１）課題の概要

　本研究では、エスタード・ダ・インディア、イエズス会、オランダ東インド会社（VOC）、イギリス東インド会社（EIC）という、広域的で非（あるいは半）国家的な組織の、おもに17世紀に本部とアジア拠点間で取り交わされた情報について、内容だけでなく、史料学的な観点からも、多角的な検討を加える。従来、南欧語史料・オランダ語・英語史料はそれぞれ別々の研究者によって担われてきた。しかし、近年、双方を視野に入れた研究が出始めている。こうした状況をふまえ、本研究は、共通のテーマについて専門を異にする研究者が密接な討論を行うことにより、そのような方向性を一層推し進める。  
　現在グローバル化する世界の中で歴史学のあり方にも変化が求められているが、海外の動向の安直な輸入や評価への対応としてではなく、日本史学の内在的発展とその成果に基づき、今まで蓄積されてきた学知のつなげ方を刷新することによって、国際的な貢献を模索する。同時に、世界的な要請でもある厳密な史料読解に基づく研究を担える次世代の育成も目指す。

（２）研究の成果

　2020年度は2回の主催研究会と共催研究会を開催し、会計史、東洋史、日本史、政治思想史、オランダ史など、学際的な討議を行うことができた。また、オランダ語史料の入門書の執筆を進め、執筆者が相互の執筆内容を内覧して検討する会も行うことができた。さらに、Corpus diplomaticum Neerlando-Indicumの翻訳を進め、大きな知見を得ることができた。

研究課題　東アジアの合戦図の比較研究

研究経費　一四八万円

研究組織

　研究代表者　　　須田牧子

　所内共同研究者　藤原重雄・金子拓・黒嶋敏・畑山周平・及川亘・林晃弘・岡本真

　所外共同研究者　板倉聖哲（東京大学東洋文化研究所・教授）・井上泰至（防衛大学校・教授）・鹿毛敏夫（名古屋学院大学・教授）・高橋修（茨城大学・教授）・高山英朗（福岡市博物館・学芸員）・堀新（共立女子大学・教授）・山崎岳（奈良大学・准教授）・山田貴司（福岡大学・准教授）

研究の概要

（１）課題の概要

　一六世紀から一七世紀にかけて、大規模戦争や王朝交替を経験した東アジア諸国では、社会が混沌から安定に向かう過程で、戦争の記憶を視覚化する様々な画像作品が製作された。日本では一六世紀後半期における川中島の戦い・長篠の戦い・関ヶ原の戦い・大坂の陣などを題材にした合戦絵巻・合戦図屏風などが作成され、中国大陸・朝鮮半島においても、嘉靖倭寇・壬辰丁酉倭乱を題材にした戦勲図・武功図が作成されたことが知られている。戦勲・武功を顕彰するための合戦図の作成流行は一六世紀～一七世紀の東アジア三国に共通する動向であったとも言いうるかも知れない。こうした可能性を念頭に置き、本研究では一六～一七世紀を中心とした、東アジアの合戦図制作の動向のラフスケッチを試み、その展開・受容過程の共通性と差異の抽出を試みる。比較の視点を持つことで、これまで積み重ねられてきた倭寇図像研究・戦国合戦図研究に新たな切り口が生まれることが期待される。

（２）研究の成果

　本共同研究の検討対象の一つである蔚山合戦図屏風については、同系統の諸作品との比較検討、描き込まれた意匠の読み解き、関連史料の探索など、いくつかの切り口から手分けして分析を進めており、この成果については、関係諸機関と調整しつつ準備の整ったものを公表する予定である。  
　このほかの二〇一九年度から二〇年度にかけて共同研究メンバーが進めた研究活動については、各自で著書・論文などにより発表を行なっている。また、本共同研究全体の成果公開としては、二〇二一年度にオンライン公開研究会の開催を予定しており、これにより研究者間での情報共有と社会全体への成果発信を行なう計画である。